
アフター・ザ・マジック

架引

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アフター・ザ・マジック

【Nコード】

N8225X

【作者名】

架引

【あらすじ】

「ねえ……。もし身近に特異魔力体質の人がいたらどうする？」
度重なる戦争を経て、才能によってその人生のおおよそが決まる魔法主体の時代から、才能によらなくても努力次第で人生を決定できる科学技術主体の移ったという、特殊な歴史を有する世界。

幼なじみ・木更津結菜と下校していた隆也。グレンフィスは、その次の登校日以降、木更津結菜が学校に來ないことを気にしていた。その後告げられる、結菜の消息途絶と、考えさせられる絶望の未来。

隆也は師であり親であり、結菜の消息途絶の真相を隆也に伝えた人であるイリア・グレンフィスとともに、結菜を救うべく立ち上がる。

第1節

1

うだるような九月上旬。夏休みが終わったとはいえ、未だに残暑が厳しいこの時期。

空から注がれる直射日光だけでも暑いというのに、アスファルトからの放射熱と、高い湿度が余計にそれを助長していた。これが授業中だったならば、死屍累々という表現も使えるくらいのローテーションだったことだろう。というか、実際にさっきまでその通りだったか。

今は授業自体が終了して間も無い時間。生徒は全員、部活動に参加するために各部の活動場所へ移動し始めたり、冷房の効いた図書室に移動し始めたり、帰宅をしたりと、思い思いの行動を起こし始めている。しかし、やはりこども暑いとやる気をそがれると思う。図書室組はともかくも、他のグループはこの暑さにやる気をかなりそがれていそう。やる気なんて特に必要ない帰宅組も、そのテンションだけは低めだろう。

斯く言う俺は、これから帰るところだ。因みに部活動には参加していない。いや、一応『アニメ・小説研究同好会』というものこそ入っているものの、参加は完全にその人の自由となっている、ルーズな同好会なために、殆ど参加していないに等しい。

そんな俺のいつもの放課後と言うのは、二パターンに分かれています。すなわち、図書室で読書をするか、そのまま帰るかである。それは完全にその時の気分によって決まる。そして今日は……帰って魔法の鍛錬の気分だった。

俺は手際よく帰り支度をし、席を立つ。そして、教室を出ようとして、

「あ、隆君。今日は図書室に行くの？」

一人の女子に呼び止められた。

「いや。今日はもう帰ろうかなって」

「え？ あ、そうだったんだ。じゃあ……今日は一緒に帰らない？」

「ああ。わかった」

「ありがとう。じゃ、行こっか」

そして、俺はその女子生徒 というよりは、幼馴染みの木更津結菜ゆいなと一緒に再び歩を進め始めた。

「それにしても、暑いねえ」

「ま、夏だからな。暑いのは当然だろ」

これが冷夏だったらそれでも無いんだろうが、今年は例年並みの暑さだった。そして今日も三十度を超える暑さだった。

下駄箱で靴に履き替え、外に出る。むわぁっと熱波が押し寄せてくる。

「……………暑い……………」

「というより蒸してる……………」

放射熱と空気中の湿度の高さ。この相乗効果はやはりきめんだ。玄関に立つ俺達から容赦なく体力を奪ってゆく。

まあ、これが何とか出来ないようでは何とか出来るからそれほど苦でも無いんだが。

別に我慢したところで、熱中症で行き倒れてしまつては元も子もない。それならば、家に着くまでだと多少負担になるものの、『魔法』を使う価値はあるだろう。いや、若干大げさかもしれないけど。

俺は徐に眼を閉じ、意識を自分の内面に向けた。体の奥底から沸き上がってくる、何とも形容し難い力の奔流。

その力を体の外部へ、噴出させるようなイメージをした。途端。

その力は、イメージ通りに体の外へと噴出された。その噴出させた力を、俺と結菜に纏わせる。これももちろん、イメージでその力に命令を出しているのだが。

そして、最後に。その噴出した力に、『ひんやりとする程度の温度になれ』というイメージを強く持ち、

「…………『我等に程よき清涼を与えよ』…………」

言霊を紡いだ。紡ぎ終わった瞬間。急速に、俺達の周囲だけ、急速に気温が下がった。

「…………え……………?」

突然のことに結菜は驚いているようだが何のことはない。冷却魔法を使っただけなのだから。

「あれ? ……今の、隆君の…………魔法…………?」

「ああ。それ以外に誰かいるか?」

周囲を見渡す結菜。だが、周囲には生徒がいるが、自分に関わって着そうな生徒は特に見受けられなかったよう。

再び、驚いたような顔で俺を見てきた。

「ん? ……どうかしたか?」

結菜の驚きようが、あまりにもひどかったので、俺は思わず聞いてしまった。それで我に帰ったのか、結菜は『え、あ、ううん。な、何でもない』と慌てて取り繕って、再び歩き始めた。

俺もそれに続いた。

「意外、だったな。隆君が、魔法を扱えるだなんて」

少し互いに沈黙して、やがて結菜の方から話しかけてきた。さっきの驚きようもそうだけど、そんなに意外だったか?

「別に隠そうとしてたわけじゃないけどな。ずいぶん前から魔法については習ってる」

「ふーん……………なんで魔法習ってるの?」

「はい?」

何をいきなり。

「俺が魔法習ってるとおかしいか?」

「そういうわけじゃないけどさ。魔法なんか習わなくなっただって、別にいいじゃないってこと。別に歴史の教科書みたいな、魔法がないと生きていけないー、何て時代じゃないんだしさ」

「…………、そうだろうけどさ。ま、やっぱり魔法って使えば便利じゃん。昔みたいな絶対的な必要性はないんだらうけど。楽はしたい

じゃん」

「クスクス……。何よそれ。変なの……。使えないからって、不便になるわけじゃないじゃん。料理の時に使う火だって、今はガスコンロとかIHがあればスイッチ一つで済むし、あかりだってそうじゃない」

「まあ、そりゃそうだけどさ」

「なら、無理して学ぶ必要なんてないじゃない？」

確かに今のご時勢だ。魔法なんて、あれば便利だなー程度で、なくてはならないと言うわけではない。結菜が言っていた通り、昔は魔法なんかで生活とか国防がまかなわれていたつばいけど、戦争が近代化するにつれて衰退。特に、『才能に左右されない戦力を』なんて感じて近代科学の礎を築いたとされる第二次世界大戦の後なんかは加速度的にその衰退が進んだらしい。

だが、それでも魔法を扱える人にとつて、魔法の利便性は捨てがたいらしい。だからなんだろう。魔法は学ぼうと思えば未だに学ぶことが出来るし、先ほど触れたように、魔法はそれなりに便利さは残っているものなんだ。だから、今でも魔法習得者の優遇制度を設けている会社はあるし、道場から通信教育、果てにはその専門学校までもあるくらいだ。まあ、現役は衰退しても需要は未だにあるって言うことだ。だから、多分使っている人も結構いるはずだ。才能はどうであれ、誰にだって少なからず使えるものなのだから。

まあ、だからといって、あからさまに『楽がしたいから』なんて理由を発言する人も珍しいかもしれない。そう考えると、結菜が先ほど笑ったのも頷ける。

「それでもさ、やっぱり魔法があったほうがより楽な生活は出来ると思ってるんだ。俺は本当に、ただ純粋に『楽がしたいから』って理由だけで学んでいるだけなんだけど」

俺がそう言うと、結菜は俺の方にはかり視線を向けてきた。やはりあからさま過ぎるのはまずかったか？ まあ、ぶつちやけ言ってしまう理由は他にもあるんだが、ちとそれで過去に暗いことがあ

る分、言いづらいし、秘密にしておきたいから、そう言ったんだが。まさかこんな視線を送られるとは……現金だが、樂をしたいと言うのも事実なので、正直少し痛い。

「はあ……。ま、怪我の治療とか、防犯結界とか、確かに便利と言えれば便利だけどね」

それでもそれはあまりにも不純過ぎない？ と、しばらくして言い返してきた。そう言われると反論出来ないから困るんだがな。

そして、俺が反論出来なくなったところで、結菜の『ま、最終的には人それぞれだからいいんだけどね』という言葉で会話は途切れた。

その後、俺は何を話そうか思いつかなかった。結菜も話すことがなくなっただのか、沈黙が流れた。

夏の強い日差しの下、しかし俺達は魔法の効果によってその熱線の軽減や空気の冷却によって春先の気候そのものの空気を味わっていた。これで桜でも見ることが出来れば完全に春だろうと言うくらいに快適な帰り道を、俺達は無言で歩いていった。だが、別段、気まぐずとかそういったものはない。先ほどの互いに、他愛も無い話と分かってしていた話なのだから。

……少し痛い視線は送られたけど。

そうして、そのまま数分経った時だろうか。突如、結菜が慌てた様子で、俺に振り向いてきた。……何だ一体？

「そうだ。そういえばこれ、いつまで続けてるつもり？ まさか、家までとか言う無理は言わないよね？」

「ん？ ま、まあ……無理、かどつかは知らないけど、一応……」
それがどうかしたのか？

「駄目！ ただでさえ隆君、魔力の運用効率がなっていないのにそんな長い時間魔法行使し続けたら先に隆君が参っちゃうよ！？」

「大丈夫だつて。なんとかなるよ」

「そんなこと言っていると、本当に倒れちゃうから！」

「心配性だなあ、結菜は」

どちらにせよ、俺の総魔力量からすれば、今のまま家に帰っても使った魔力量は微々たる物でしかない。もつとも、結菜はそれを知らないからこうして俺に魔法行使をやめさせようとしてくるんだけどな。放出した魔力は初心者でもすぐにわかるけど、どうしても相手が保有する本来の魔力と言うのはそれ相応の『特異体質』を持つ人じゃないと感知できないらしいし。

「もつ……」

説得が無理とわかったのか、結菜は頬を膨らませながらも、引き下がった。そうだそうだ。そうやって楽にしていればいい。俺が好きでやってることなんだから。

第2節

2

「ねえ、隆君」

「ん？ なんだ？」

突然、トーンを下げて、結菜が声をかけてきた。

「隆君は……特異魔力体質の人が身近にいたら、どうする？」

「特異魔力体質の人、か……」

正直、微妙な質問だな。

特異魔力体質。稀に、特異な魔力をもって生まれてくる人がいる。特定の属性にのみ特化していたり、人の身では扱い切れず、いつ暴走を起こしてもおかしくないくらいの魔力量を持っていたり。そういった特異な魔力を持つことを、特異魔力体質と言う。

まあ、後に上げたほうの例は障害以外のなものにもならない。

だが、後者に比れば前者は安全、と言えばそうではない。前者の場合でも、危険は危険だ。特定の属性にのみ特化していた場合。そう言うのは稀にしかないのだが、そういった人の殆どはその人にしか扱えない、適性のある属性にまつわる強大で特殊な魔法を保有しているらしい。そこで問題が出てくる。

裏業界の皆さんに耳に入れば、執拗に入らない勧誘を受ける羽目になると言うことである。しかもその勧誘内容が問題だという。

例えば、『ちよつと力寄せや』とか。この場合の力を寄せせと言うのは、何らかの手法で魔法を強制発動させる類のものらしく、そうなってしまうえば使われている本人だけではどうすることも出来ないんだとか。俺の魔法の師匠が言っていたことである。

とにかく、そういった点で言えば、前者の例は後者の、所謂魔力関係の障害例よりも厄介なことが出てくる、と言うことである。

だが、彼女が何で、そんなことを聞いて来るんだ？ 別に、彼女

に關係ある話じゃあるまい。

「ねえ……答えて」

おっと。そんなことを考えていたら、急かされてしまった。でも、心なしか、今にも消え入りそうな、そんな声色で言われては、これ以上待たせる気も失せてしまう。

「さあな。少なくとも秘匿はするよ。でも、それ以外のことはわかんね」

というか、俺自身、それなんだけど。俺はどっちかという障害の方で、『魔力制御障害』というものと、『触発性魔力制御不全』というものの二つも持つて入る。どちらもまだ原因がはつきりしていない、先天性の障害だ。だが、原因がはつきりしていなくても、魔力制御障害の方ではないことくらいはわかってきており、努力しだけで改善は出来ることもわかってきている。だから、この七年間、みつちりと魔法の制御の鍛錬をしているわけなんだが。

「そう……」

そういつて、彼女は顔をそらした。

なんか、空気が重いな。どうしてこうなった？

「ねえ……」

「ん？ 何だ？」

さつきとは裏腹に、今度は俺に何かを期待するような声で、聞いて来た。

「もし。もしもだよ？ 私が、特異魔力体質で、その体質の所以になつている力を狙つている連中に、私が捕まったら……。助けてくれる？」

「ゆい、な……？」

訳がわからなくなった。

どうして、彼女がこんなことを言ってくるのか、わからなかった。でも、これだけはわかる。彼女は今、……。何かに心を揺さぶられていて、崩れかけている。ここで滅多なことを言えば、彼女はきつと……。絶望する。根拠はない。ないけど、そんな気にさせられる。

「助けて、くれるかな。そうだったら……」

「ああ。絶対に助けると約束する」

だから、俺にはそういうしかなかった。

でも、どうしても気になった。だから、何故そうなったのか、聞くことにした。

「なあ、結菜……」

「何？」

結菜は何でもなさ気に応答してきたが、その声色はやはり少し震えて入る。

やっぱり、俺にはわからないけど、結菜の心は今、すごく揺れているに違いない。それも、日常生活こそ何とか送れて入るもの、ふとしたきっかけで抱いている不安やらなんやらに心を揺さぶられる。それくらいに今の彼女は不安定な状況なのかもしれない。

その不安がどんなことに対する不安なのかは俺にはわからないけど、相談には乗ってあげられると思う。

「結菜、どうしてそんなことを聞く？」

「えっと……え？ 意味が、わからないよ」

「つまり、何で急に、助けてくれるか、なんて聞いてきたんだよ」
努めて柔らかい語調で、結菜に問いかける。が、結菜から返ってきた答えは、

「あ、さっきのこと？ 別に気にしなくていいよ。あんなこと聞いたちゃったけど、実際のところ、隆君じゃ、きつと無理だから……」

言葉が進むうちに声が小さくなって言ったけど、何とか聞き取ることが出来た。でも、俺じゃ無理？ どういうことだ？

「何が無理なんだ？」

「言えないよ。言ったら多分……巻き込んだじゃうから……」

「何にだ？」

「……だから、言えないの。言いたくない。巻き込みたくないの」

「巻き込むって、だから何に」

「……ッ！」

パン……。

辺りに響く、乾いた音。それは、俺の頬が張られた音だった。

「しつこいよ！ それ以上は聞かないで！ 詳しくは言えないけど、とにかくこれは私の問題なの！ 隆君の問題じゃないから、巻き込みたくないって言うてるのが、わかんないの!？」

結菜が、声を張り上げてそう糾弾してきた。そして……。その目から零れ落ちる、小さな雫……。それは、涙だった。

それを見て、俺は少し後悔した。

踏み込みすぎた、と。結菜は確かに言った。巻き込みたくないのなら、必然とどんな状況に置かれているのか、それを隠そうと、隠したいものだ。

なのに、俺はそれに気付かずに、彼女の心へ土足で踏み入るようなまねをしてしまった。

でも、同時に知ってしまった。

彼女の心を、そこまで追い詰める何か。その存在。級友として、幼馴染みとして。そして、密かに好意を抱いている身として。どうしても放って置くことが出来ない俺がいるのも、また、事実だった。だから……。

「……。じゃあ、一つだけ、これだけは答える。そしたら、何も聞かないでいてやるから」

せめて、ヒントの一つくらいは、もらっていいよな。

「何を？ 言うておくけど、私は、何も答える気はないよ」

未だに泣きながらも起こるといふ器用な真似をしてそう言うてくる彼女に、どうすればヒントをもらえるか、それを考える。

そして、俺は口を開いた。

「結菜」

「え……?」

俺の質問に、結菜は、呆気にとられたかのような顔をして、そして答えた。

そして、俺はその問いに、確信めいた、何かを掴んだ。そんな手

ごたえを感じるのだった。

第3節

3

翌日。昨日の帰り道に、あんなことがあったとは言え、時間は誰にも平等に過ぎるものだ。それならば当然、朝だって誰にも平等に訪れる。

今日は土曜日。と言うことで、休日である。始業式（先週金曜日）から早くも一週間過ぎたが、やっぱり夏休みの気分が抜けきらない。もう一眠りしたい気分ではあるが、そうはいかない。何故なら、このようにそれを許してくれない人物がいるからだ。

「おはよう！」

「おはよう、イリアさん」

勢いよく部屋に入ってくると同時に、高らかに朝の挨拶を放ってきたこの女性である。

外見的特徴としては、背中まであるセミロングの髪はブロンド、一種の色素欠乏症らしく、紅い瞳だ。だが、特殊なコンタクトレンズをしているらしく、色素欠乏症でもまったく問題ないらしい。

この人は俺の魔法の師で、国際魔法技術管理機構、通称『IMS MO』の『特定魔法技術者等観察員』と呼ばれる仕事をしている人で、名前を『イリア・グレンフィス』という。この人は俺が引き起こしてしまったある事件がきっかけで、七年前に俺の所に現れた人だ。その時は、

『貴方はIMS MOが定める基準によって、要廠戒観察者に該当すると判断されてしまったの。早い話が、貴方の魔法の才能は暴走しやすいほどに不安定なものだから、監視のもと暴走を起こさないように魔法をものにしてもらいたい、ということ。嫌だとは思っけど、出来る限り私の言う通りにしてもらえるとありがたいな。全面的に逆らわれると、その場合は力尽くで従ってもらうことになる。そん

なことはしたくないから』

と言いたい放題言ってくれた。当時の俺は、まだどういうことなのかわからなかったから、されるがままだったけど。

両親が何処へ言ったのか、という疑問と不安は当時の俺には拭うことが出来なかったから、よく親がいないことに泣いたりもしたっけ。父さんと母さんは何処へ言ったんだろうつて。

さて、昔の感傷に浸ってしまったが、とにかく美しいという表現がよく似合う顔立ちのこの女性は、性格がとことん優しい俺の今の保護責任者役だ。だから俺の姓も今は『グレンフィス』になっている

「よく眠れたようで何より。でも、いつまでも夏休み気分ではいかんよ、少年」

クスクスと軽いノリでそういつてくるが、わかっけてそう言っているのがなんとも腹立たしい。

だから言つてやった。

「少なくとも誰かさんのお陰で毎年毎年夏休み気分と言うものは味わえてませんけどね」

「そう。それは気の毒ね。それで？ その誰かさんに、なんか文句でもあるのかな？」

が、返事は背筋が凍りつくような視線と言葉だった。くそう。

「さあ、そんなことより、朝食としましようか」

「……わかったよ」

無駄と知りつつも最後に非難の目を送り、俺の寝室から出るイリアさんに続き、寝室から出た。

因みにイリアさんはアメリカ人だが、仕事柄五カ国の言語をマスターしているとか。だからなのか日本語もぺらぺらだ。そして、先ほども触れたが母親のような存在ではあるのだが、『義母さん』とか呼ぶと『親と子供というほど歳が離れていないのにそう呼ばれるのはなんだか変』と、丁重に断られるので、他人行儀みたいだが、イリアさんと呼んでいる

ダイニングキッチンへ入ると、そこには既に料理が盛り付けされた皿が配膳されており、あとは主食を置くだけの状態になっていた。俺は手近な椅子へと座る。

「はい、隆也」

そして、若干遅れてイリアさんが御飯を盛った茶碗を手渡してきた。

「ありがとう」

イリアさんも、自身の分を盛ると、反対側の椅子に座った。そして、どちらからともなく、朝食に手をつけ始めた。

「……学校はどう？」

「んー、まだ夏休みの気分が抜けない人が多いな」

「へえ。リユウヤはどうなの？」

「俺？」

わかりきったこと言うなよ。

「さつきも言った通り、俺はそうでも無い。多分、イリアさんの訓練がなければ、皆と似たような感じだったと思う」

「そう。でもさ、雰囲気的には案外そうでもないと思うんだけどなあ」

監視されている俺が言うのもなんだけど、イリアさんの仕事は言うなれば俺の監視である。その範囲は、学校生活から日常生活までその全時間帯に及ぶ。故に、本人曰く、主に離れたところから直接監視、その他補助として使い魔とかで監視しているらしいが、ようは俺の奇行も全て彼女に筒抜けと言うことである。いや、してはいないけどさ。

でも、それでも聞いてくるのは、観察するだけではわからないものもあるからなんだろう。主に、家族として。

「ああ、そうそう。周りの雰囲気と言えば、昨日結菜と帰ってきたじゃん？」

「え？ ええ。それがどうかした？」

急に狼狽するイリアさん。あれ？ どうかしたのか？

「いやな。急に、『もし結菜が特異魔力体質で、裏の連中に狙われる、何てことがあったら助けしてくれるか』って聞かれてさ」

「……、そっか」

それを聞き、さらに暗い顔をするイリアさん。やっぱり、何か彼女には何か抱えている問題があるらしい。

そう思い、どうかしたのかと聞こうと思ったが、しかし次の瞬間にはもう普通に食事をしていた。顔も元通りに戻っている。つまりは、もうこのことは聞くな、と言うことか、結菜と同じく。

「それで、リュウヤはそれになんて答えたの？」

「もちろん、絶対助けるって言ったさ」

まあ、正確に言えばそれだけじゃなくて、そう言わざるを得ない何かを押されたから、そう言ってしまったのだが。本人が本当に助けを求めている場合もあるとすれば、今思えばそれはあまりにも責任重大な回答だったな。

「なるほどねえ……。しかし、絶対、かあ。いいのかな、そんなこと言っちゃって。女の子に対してその発言は重大だよ？」

う。改めて言われるとより重くのしかかってくる。しかも言った相手が相手だ。俺と結菜はまあ、互いに一番の信頼を置き合っている仲だと思う。約束を違えるなんて真似は絶対に出来ない。

まあ、結菜は俺と違って、普通の体質だと思うけどな。特異魔力体質がそう何人もいるなんて、それこそ奇跡に近い確立なんだろうし。

「さて、食べ終わって諸々の家事が終わったら修行するから準備しときなさい」

「はい……」

やっぱり休みだからのんびり、と言うわけには行かないか……。

「ほらほら、そんなんじゃ結菜ちゃんの王子様にはなれないよ？」

「余計な、お世話、だ……」

現在、昼下がり。魔法の鍛錬が終わったのはそれくらいの時間だ

った。

因みに魔法の鍛錬を始めた主な理由はIMSMOの観察員としてのイリアさんの指示だったからだ。楽がしたい云々、他の理由はその後からついてきた欲求みたいなものだ。

そして、その修練を負えた俺は、住んでいるマンションから最寄りの運動公園の地べたに座りこんで、荒れた息を整えていた。勘違いしないように言うておくが、イリアさんと実戦訓練、何てことはしてない。ただ、彼女の指示のまま、魔力の制御の練習をしていただけだ。

魔力の制御の練習方法には、

- ・何でもいいから実際に魔法を使ってみる
 - ・実戦訓練
 - ・イメージトレーニング
- の三通りがある。

俺が行っていたのは一つ目の『何でもいいから魔法を使ってみる』だ。ただ、俺は普通の人と違って魔力の制御をしにくい体質を持っている。故に、魔力の制御中は、他の人と違ってずいぶん精神的な疲労が溜まる傾向にある。

昨日、帰ってくるときに冷却魔法も使ったけど、あれも結構疲れた。特に、火や温度を操る温度属性はどちらかと言えば適性がないほうだから余計に。まあ、あれくらいなら例え俺でもそれほど負担になるような魔法ではなかったから、躊躇することなく使っただけだ。

「まあ、でも、大分マシにはなってきたから安心はしていいよ。慢心はいけないけど」

慢心はいけない。それはごもつともで。

「さて、と。今日はこれくらいにして切り上げよっか」

「賛成……。つか、腹ペコだよ……」

この場で何よりも重要なことをサラリと行って見た。

そう。俺達は、魔法の鍛錬を始めて以降、水分以外は何も口に入

れていない。もう昼下がりのいい時間になっているというのに、昼食すらもとっていないということだ。だから腹ペコなのだ。

「で、何処にする?」

もちろん、昼食を何処で買うかだろう。

「あー、近くのスーパーでよくね?」

「スーパーでいいの? ファミレスとかファーストフードとかっていう選択肢もあるよ?」

「うーん……いや、今日はどっちかって言うとスーパーとかコンビニとかの弁当の気分なんだよ」

「そう。わかった」

そして、俺達は家付近のスーパー、『やすよろず』へと向けて歩き始めた。

「ねえ、朝の話、覚えてる」

「何だよ急に」

朝の話っていうと……あれか、学校がどうのと言う話とか、結菜がどうのと言う話とかか。

「それがどうかしたのか?」

「いやね、昨日の下校時の話。私、結構と置くから見えたから、何て話しているのかは聴こえなかったんだけど……最後って、何話してたの? なんか、結菜ちゃん泣いてるみたいだし、リュウヤ頼張られてたでしょ。女の子にそこまでやらせるなんて、見過ごせないなー、私としては」

「んな!?!」

何てこと言うかね、この人は。

それじゃまるで俺がやましいことでも話したかのようないいようじゃないか。

イリアさんはさらにこんなことを言ってきた。

「いい? どんなことであっても、女の子に頬を張らせるような真似する男は最低なんだから、気をつけなさいよ?」

「ま、待ってくれよ。俺はそんな疚しいこと、発言してないぞ!」

「あら。じゃあ、結菜ちゃんが涙流しながら頬を張ったあれは何なのかなあ？」

「あ、あれは、何で急に『助けしてくれるか』なんて聞いてきたのか気になったからつい……その、な？」

「ふむふむ、それで女のこの心に土足で上がりこむような破廉恥な行動を決行したと」

「は、破廉恥ってな……」

ほ、本当に何なんだよ急に。

しかもイリアさんの顔がものすごくイイ顔になっているし……あれ。もしかして、俺。はめられているのか？

「確かに土足で踏み込むような真似したのは悪いと思ってるさ。でも、素直に謝ったぞ」

「へえ……素直に謝って、それだけ。本っ当に、それだけなんだね？」

「はあ！？ まあ、そうだけど、それがなんだよ」

「この甲斐性がないやつめ。もげろ！」

「もう意味不明だ……」

だめだ、理解不能。放っておこう。

……しかし、何でイリアさんは急にあんなことを聞いてきたんだ？ やつぱり、同姓として気になることでもあったからか？ 答えは謎のままだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8225x/>

アフター・ザ・マジック

2011年11月7日09時04分発行